

清川村立緑中学校

研究テーマ：指導と評価の一体的充実

～身に付けさせたい資質・能力を見取るための評価方法の研究～

1 実践の目的

この研究テーマは「これまでの研究で行われてきた指導方法等の工夫・改善を基に、積極的に取り組み、学習者が獲得した学力をより正當に評価するためには」という考えのもとに設定した。

研究テーマに迫るために、「単元で身に付けさせたい資質・能力とは何か」、「どのように身に付けさせるべきか」、「身に付けさせたい資質・能力を、どんな評価方法で評価するのがよいか」といった視点をもって、全職員で単元構想を練った。

2 実践の内容

4月の研究全体会では、今年度の研究の構成を確認した。また、研究授業を行う教科について話し合い、今年度は社会科の授業に決定した。

5月の授業研究会では、研究授業科目にあたる社会科の学習指導要領をもとに、単元の構想について全職員で議論をした。

6月の指導案検討会では、授業者から研究授業該当学年の様子や単元計画の概要について説明したのちに、資質・能力の育成にふさわしい学習課題が設定されているかについて検討を行った。

9月には、6月に出た意見をもとに修正された指導案の内容を確認しながら、再度指導案検討を行った。

11月19日には、これまで携わっていただいた神奈川県教育委員会子ども教育支援課指導主事のみならず、県央指導主事指導

主事、横浜国立大学鈴木准教授や大学院生、他市の先生をお招きし、社会科の授業で、研究授業を行った。実践した評価方法は口頭試問である。地理的分野のまとめた立ち位置にある本単元では、これからの清川村の在り方について考える課題を提示した。口頭試問では「岡山県西栗倉村の取組を参考に、宮ヶ瀬小学校の校舎を活用して宿泊施設を作りました。」「東京から一番近い村であることを生かして、観光型バスツアーを組み、村の魅力を伝えようと考えています。」「長野県阿智村の取組を生かして、移住者の体験談を設定し、村での定住者増加に結びつけようと考えました。」といった声が上がった。中には自分が考えていることを文章に書くことが苦手な生徒もいた。そういった面でも、文章では表出できない考えを口頭試問で拾うことができた。

授業後には、本単元に口頭試問という評価方法が適切だったのかを、学習指導要領や「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料を基に、検討した。



【口頭試問を受ける生徒の姿】

3 実践の成果と課題

今年度は、「単元で身に付けさせたい資質・能力とは何か」、「どのように身に付けさせ

るべきか」、「身に付けさせたい資質・能力を、どんな評価方法で評価するのがよいか」を生徒の実態と合わせて、授業改善を行うことを大切にしてきた。これは、研究授業を行った社会科だけでなく、各教科全職員で大切にしてきたことである。

今年度の研究を通して、単元で身に付けさせるべき資質・能力の明確化とそのため単元計画、資質・能力を適切に見取るための評価方法の大切さを改めて実感することができた。さらに、指導と評価を一体化させるための視点も欠かしてはならないことも再認識することができた。

下記「生徒アンケートの結果」では、1学期と比べて3学期では微増ではありながら、肯定的な回答が増える様子が見られたと同時に、生徒自身が解決したいと思う課題設定の重要性も理解した。

「生徒アンケートの結果」

(肯定的回答の推移)

①学校の授業は好きですか。

そう思う 44.0% → 46.3%
(1学期) (3学期)

②授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。

そう思う 44.0% → 48.8%
(1学期) (3学期)

4 今後の展開

次年度は今年度の成果と反省をもとに、新たな研究テーマを設定し、研究を進めていきたいと考えている。

さらに、全職員と研究テーマの設定理由などについてしっかりと共有し、目的を明確にした上で相互授業参観や授業に関する協議を行っていくと同時に、各教科の学習と総合的な学習の時間の探究的な学びが結びつくよう、教科横断的なカリキュラム・マネジメントにも努めていきたい。

今後も生徒の身に付けた資質・能力を適切に評価するためにも、生徒の学びの実態にもとづいて指導の工夫・改善を図っていき、小規模校の特性を生かし、一人ひとりの生徒の「学びたい」という意欲を刺激し、豊かな学びを実践するための研鑽に励んでいく。



【社会の歴史的分野の課題に取り組む姿】



【「総合的な学習の時間」における探究的な学び】